

浦田 武雄

今日吾等の自由、権利は剝奪されて居る、最近のフアツシヨ運動が起ると自由主義の學者迄も壓迫される、水平社諸君は二重の搾取を受けて居る、吾々が支持することは當然だ、明治初年解放されたに不拘未だ差別されることは明治の改革が不徹底だったのである、高松裁判所問題は偶然ではない、故にこの請願運動は重大なる意義を持つものだ、自由と権利を剝奪された被壓迫大衆と團結せよ、東京へ向ふ請願行進隊を支持せねばならぬ、而して行進隊の經費に對して支援せよ。

行進隊代表

何

某

九月二十六日の出發が十月一日に延びたのは水平社が弱かつたが故ではない。吾々の運動の威力に恐れられた支配階級の彈壓のためだ。各地の青年團や在郷軍人の兄弟は行進隊を待ち兼

ねてゐる、處々女會では壓迫された隊員の服は破れ加減はちぎれて来るだらうと針と糸とを持つて待つて居たのである。吾々の正しき要求のために血の最後の一滴まで闘ひ抜くものである。

差別裁判糾弾團等全國常任委員 吉田 某

高松の差別裁判に對し血の叫びをあげて請願行進をせんとするのは無理であるか、不當であるか批判を請ふ。理由あるならば差別も甘んじて受けよう、然るに高松に乗込んで慎重取調への結果は當局の不當であることを信じたので全兄弟に檄を飛ばせたのである。八月二十八日全國部落代表者會議を大阪に開いたところ三府十五縣より一二六名の代表が大阪公會堂に詰めかけた。そして如何なる壓迫を蒙るとも飽くまで決行せんと決議したのがこの請願行進である。吾々は既定の方